THE KYOTO UNIVERSITY MUSEUM

July 2013

Newsletter No. 28

京都大学総合博物館ニュースレター

京都大学では，水族館や野生のイルカを間近で科学的視点で観察し，その行動や生態，そして知性を明らかにすることも行われている（写真提供：森阪匡通）。こうした研究の成果も，本年度企画展「海」（本文参照）で展示する。

平成 25 年度　京都大学総合博物館企画展　「海」................. 2
（特別展）「地図　温故知新」.. 3
（ロビー展示）「21 才の 21 ケ国の旅」.................................. 4
台湾大学博物館群と国際シンポジウム.................................. 7
青空子ども博物館 in 円山 7
「地質の日」記念企画展.. 7
総合博物館日誌（平成 25 年 1 月～平成 25 年 6 月）............. 8

平成 25 年度
京都大学総合博物館企画展　「海」

開催期間：2013 年 7 月 31 日～ 12 月 1 日

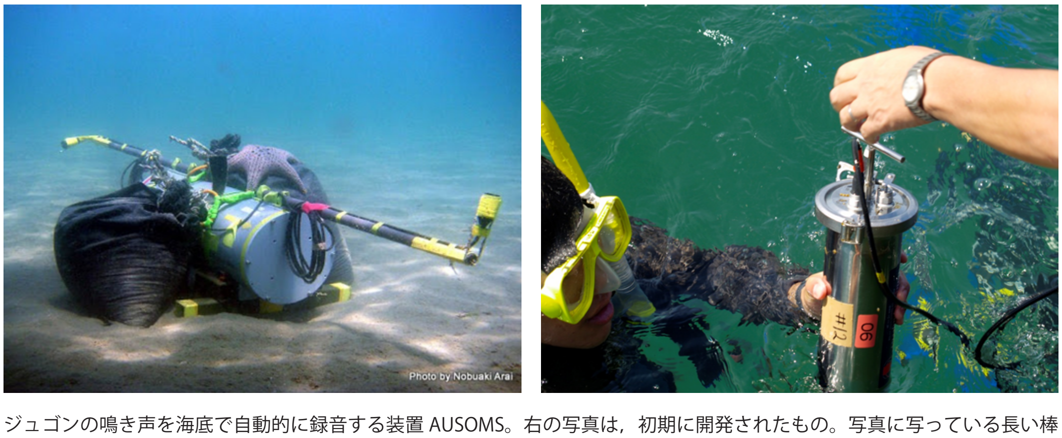
京都大学総合博物館では，2013 年 7 月 31 日より 12 月 1 日まで，企画展「海」を開催する。京都大学は内陸部に位置するが，海を対象にする研究者が多数在籍し，海の物理学から生物や人の営み，さらにその歴史まで大変幅広い分野にわたって海の研究を行っている。

昨年夏，総合博物館では 8 月 1 日（水）～ 8 月 12 日（日）にかけて，「来て，見て，触って。京大の海棲哺乳類研究」展を開催した。この展示は，主に大学院生が主体となって準備したものだが，彼らの行動力で横のつながりをたぐってゆくと，京都大学は海棲哺乳類の研究だけをとりあげても一大拠点であることがわかった。そこで，京都大学の海に関する研究の全貌を一度明らかにしてみたいという願望が学内あちこちから上がってきた。さらに，理学研究科地質学鉱物学教室の松岡廣繁先生と，大学院生の丸山啓志君とが中心になって関連分野の先生がたにお声がけしたところ，大変積極的な反響があった。そして，理事・副学長で海洋物理学が専門の淡路敏之先生を実行委員長に，現在展示の準備を進めている。

展示では，黒潮と親潮が接する場であり，大陸プレートと海洋プレートのはざまに位置する日本を海の視点からとらえることを企画，海のはじまりと生命の歴史を解き明かすことに始まり，現在の海の振る舞いをはかり，しること，さらにそこにいきる生物，また海とともにいきるヒトの生活とその未来を俯瞰することとした。その結果，以下の 5 部構成となった。

第一部　海のはじまり
第二部　海をはかる
第三部　海をしる
第四部　海にいきる
第五部　海といきる

まず，第一部では，どのようにして海が生まれたのか，海の底のプレートやそれを作る岩石の話，生命の進化と海の関係などのトピックを展示する。第二部では，展示委員の一人理学研究科の余田成男先生が京大の海洋研究の特色は，近年計測などの技術の発展にともなって大きく進展したことだと看破されたこともあり，観測機器の進歩について実物や模型を使って紹介する予定である。その一つは，水深 2,000m から海面までの間を自動的に浮き沈みして 水温・塩分等を測定する海洋観測計器アルゴフロートと呼ばれる観測機器である。この計器は，国際協力によって年々投入が続けられており，海洋の全体構造がほぼリアルタイムで観測可能となりつつある。海洋生物学の分野でも，生物に小型化した観測・記録計を取り付けて，生態を詳しく調べる



ジュゴンの鳴き声を海底で自動的に録音する装置 AUSOMS。右の写真は，初期に開発されたもの。写真に写っている長い棒の先端にはマイクがついていて，ステレオ録音し，鳴き声の聞こえた方向を決めることができる。左の写真は，よりよい性能で小型化されたもの。現在ではさらに小型・高性能化がなされている。

ことが可能となった。また，音響記録器なども数年の間に小型化が進んでいる。その一例として京都大学が協力してアクアサウンド社が開発した，海底に設置して希少動物のジュゴンの鳴き声を受動的に記録する装置 AUSOMS の小型高密度化の歴史も展示する（写真参照）。第三部では，これら計測機器の進展によって得られた情報から，海洋物理学や海洋生物学にどのような新知見がもたらされたかを紹介する。第四部では，化石を用いて現代に至る生命の歴史や陸から海に戻った脊椎動物の進化の歴史を概観したのち，小型の記録装置を動物につけて研究するバイオロギングの手法で見えてきた，海にいきる動物たちの生態などについて紹介する。第五部では，縄文時代から人が海とどのように関わって生きてきたか，また，関西新空港を事例にどのように利用しているか，さらには海がもたらす災害についても，地震を起こすプレート境界のボーリングコア模型，津波堆積物をもとに展示を行う。

巨大なアンモナイトなどの化石，海の哺乳動物の骨格標本なども多数展示，また，地球に見立てた直径２メートルの大スクリーンに海の様々な姿を映し出す予定である。さらに，海の生き物の鳴き声をあてるクイズなどもあり，小学生からシニアまで，楽しく海の最新像を感じていただける展示とする予定で，是非とも多くのかたに見ていただければ幸いである。

（京都大学総合博物館長　大野照文）

（特別展）
2013 年京都国際地理学会議開催記念
「地図　温故知新」

開催期間：2013 年 7 月 31 日～ 9 月 1 日

2013 年 8 月に岩倉にある国際会館で IGU Kyoto Regional Conference 2013（2013 年京都国際地理学会議）が開催されることを記念した地図展「地図　温故知新」を，京都大学総合博物館の特別展として開催していただけることになった。開催をお認めいただいた総合博物館の館長はじめ皆さまに，まずは感謝申し上げたい。

本特別展を主催するのは，同会議の組織委員会と京都大学文学研究科地理学専修で，京都大学の各部局に所蔵される地図のなかから，重要なものを厳選して展示する予定である。ここでは，その内容の一部を紹介することにしよう。

たとえば，京都大学に所蔵される古地図のなかでもっとも著名と思われるのが『坤輿万国全図』だろう。これはイタリア人イエズス会士マテオ・リッチが中国で刊行した世界図で，現在，世界で数点しか現存が確認されていないものである。隅の方に小さく穴があいているが，これはイエズス会の紋章があった部分が切り取られているからで，欠損しているからこそ歴史を感じさせる，というものである。

また，東西交流を示す史料という点では，オランダで作られた図をもとに作製されている日本製の地球儀も重要な史料である。この地球儀は，京大に所蔵された当初は球面を保っていないような状態であったが，丁寧な修復が施された結果，出陳にも十分に耐えられる装いとなっている（写真１）。

（写真 1）ファルク系地球儀

一般にも知られた図としては，やはり「伊能図」を挙げないわけにはいかない。今回は同時代に活躍した他の測量家の成果も併せて展示することで，伊能忠敬を代表とする近世後期の様相を提示することにしたい。また，それに続いて近代地形図や空中写真を出陳する予定にしているので，その後の測量技術や地図作製の展開についても，理解していただけるのではないかと思う。

伊能図のように，「正しさ」を求めるものだけが古地図の範疇に入るのではない。絵画的描写を多分に含む図も，重要な史料群である。今回は鳥瞰図や真景図についても，重要な位置付けをおこなっている。伊豆諸島や蝦夷地の真景図については，これまであまり知られていなかった史料でもあり，その意味でも一見の価値はあろう。

また，今回は災害図のジャンルからも数点の展示を行う。特に天明３年（1783）に起きた浅間山の大噴火を描いた作品は，その激しさが生々しく描かれる（写真 2)。昔の人々が災害をどのように記録し，後世に伝えようとしてきたのかを，感じ取ってもらえればと思う。

その他の出陳品も含め，地図史を知らなくても「面白い」と思える展示となるよう，全体を企画している。ぜひ，足を運んでいただきたい。（2013 年京都国際地理学会議組織委員会委員　京都府立大学　上杉和央）

（写真 2）浅間山焼之図

(ロビー展示) 京都大学総合博物館及び国立台湾大学開催

草の根の国際交流企画

「21 才の 21 ケ国の旅—東南アジア，アフリカ＆シルクロード陸路横断—」

開催期間：2013 年 5 月 15 日～ 6 月 30 日

1) 国立台湾大学での写真展の経緯

2010 年 9 月，京都大学在学一年目であった私は，ベトナムで初めての一人旅をしました。初めての海外旅行でした。帰国後，平成 22 年度後期全学共通科目の中に，Human Life in ICT Era という講義を発見しました。学術情報メディアセンター教授 (現国際高等教育院教授) 喜多一先生が主催し，京都大学と国立台湾大学間をつなぐ遠隔講義でした。ベトナムでの旅を終えてから「普通に旅するのは面白くないのではないか？外国にいる友人に会いに行く旅はもっと面白いのではないか？」，と考えていましたので，台湾に友人を作り，そして遊びに行くという計画で，この授業に参加することにしました。

その講義において今でも印象に深く残っている場面があります。それは授業開始時の自己紹介の時間でした。自己紹介の番が私に回ってきたときに，「台湾に今度行こうと思うので，その時は面白いところに連れて行ってください！」と言いました。すると，おー！という歓声が上がるのかと思いきや，まばらな，パチ，パチ…，という気だるい拍手の反応だったのです。出端をくじかれましたが，なぜそのような反応だったのか気になり，その年 11 月に休みを使って会いに行き，直接理由を聞きました。

理由は「授業が開催されて三年経つが，君のように

国立台湾大学での写真展の様子その 1

国立台湾大学での写真展の様子その 2

発言して実際に来たのは君だけだったからだ」，ということでした。これを台湾で聞いたときは，情けない話だなあ，と心底思ったものです。

それはともかくとして，彼らと実際に会ってみると私の中で二つほど発見がありました。一つは，とても流暢に英語を話す台湾大学の学生でもやはり母国語でない言葉を話すのに苦労し，気恥ずかしく感じていた，ということ。もう一つは，遠い国で違う文化の中で育っても，彼らもまた私と同じように暮らす人間であると気づいたことです。これらの発見がその後の私の歩みに大きく影響することになりました。

そのような発見から，ただでさえ下手くそな英語しか話せない自分が気恥ずかしいからと英語での会話にだんまりするのは馬鹿げている，という気持ちの変化が起こり，もっと積極的に英語を使うようになれたのです。また後者の発見で，この世界は自分の周囲の人間の暮らしが延長されているだけだと気づき，それによってどの国にいようが気兼ねなく現地の人と会話できるようになりました。

一学生がこのような発見をできる機会を頂けたことに対して，遠隔講義を主催してくださった京都大学の喜多先生を始め，台湾大学の主催者である岳修平先生，林維真先生に非常に感謝していました。もちろん，直接これらの発見をもたらしてくれた台湾大学の学生にも心から感謝しています。そしてこの英会話や外国人と向き合う姿勢の変化が，在学三年間で世界 21 ケ国を訪問する旅へとつながったのです。

丁度シルクロード横断を始める直前の 2012 年の春頃に，遠隔講義が二年連続閉講され続けているというお話を喜多先生からお聞きしました。私は，あれほど学部一年，二年の学生の国際交流のニーズに合った授業はない，と考えていました。そこで横断を終えて帰国した去年の 11 月に，喜多先生の許に出向き，その理由をお尋ねすると，「台湾大学側の学部生がなかなか集まらず，台湾大学の教育院のほうから開講の許可が出ないのです。」とのことでした。それを聞いて，「では私が台湾大学との学生との交流によって得たものを紹介する写真展を台湾大学にて行い，遠隔講義の素晴らしさを台湾大学の学生に宣伝します。」というお話をさせていただいたところ，「実は今年も閉講が決まっています。」ということでした。

こうして，遠隔講義の宣伝という当初の目的は断念しましたが，せっかくの機会なので台湾大学で台湾大学の学生と何か企画をやってみたい，優秀な彼らがどんな提案をしてくるのかを見てみたい，旅行から得た経験を彼らへのお礼として還元したいという気持ちがあり，台湾大学の友人に写真展の企画を話してみました。これが今回の台湾大学での企画の起こりになります。

2）国立台湾大学での写真展の実現

台湾大学の友人にこの企画を持ちかけたところ，友人の中に台湾大学側の遠隔講義の主催者である岳先生の助手を務めている友達がいました。そして，その友人が直接岳先生と同講義を担当されていた林先生に企画の話を持ちかけてくれました。すると，岳先生から，「ぜひその企画を実現してほしい，場所なら国立台湾大学博物館群農業陳列館一階のカフェスペースを提供します。」と仰って頂き，また林先生から展示の内容を相談に乗って頂くなど積極的なご支援を台湾大学側から頂くことになりました。

この話を喜多先生に逐一報告しながら，相談を持ちかけていたところ，京都大学元総長の長尾眞先生，国際交流推進機構長の森純一先生，情報環境機構長の美濃導彦先生という錚々たる先生方を紹介頂き，手厚いご支援を頂くことになりました。実に多くの先生方の暖かいご支援のおかげで，台湾大学での写真展の企画の基盤が着々と整っていきました。そうして，自信を持って台湾大学に出向き，台湾大学の友人と写真展の実現に向けて動き出しました。

3）総合博物館での企画の経緯

準備を進めるにあたって，実はご支援いただいた先生から，支援する代わりに定期的にこのような企画を行えるように一つ知恵を絞ってほしい，というお話しがありました。何か案はないかと考える中で，台湾大学だけでなく京都大学でも学生が企画した展覧会を開催すれば，定期的な企画の交流を実現できるかもしれないと考えるにいたりました。

総合博物館の大野照文館長と一度お話しできたら，という思いをあたためながら，台湾大学にて写真展の

京都大学総合博物館での写真展の様子

準備を進めていた際，幸運にも博物館交流で台湾大学に来られていた大野先生に，岳先生を通じてお引き合わせ頂くことができました。大野先生に経緯をお話ししたところ，台湾大学で行った展示をそのまま総合博物館で行うよう，ご提案いただいた次第です。

4) 展示の内容

展示は，好奇心あふれる京大生の皆様や縁あってご覧になられた方々に世界に出て行くことの面白さを感じてもらい，自発的に世界に目を向けてもらうことを意図しました。そのために在学三年間で訪れた 21 ケ国の写真をその国で起こった特に海外ならではの出来事に関わる文章を交えながら紹介しています。例えば，日本の常識に縛られて痛い目にあったことや，母国語の異なる人々と意思疎通できたり親切にしてもらったりして感動したこと，などを紹介しています。

以下に，展示した写真と文章の一部をご紹介しましょう。

5) この展覧会の先にある未来に向けて

外国で暮らす人間が一体この世界にどのような認識を持って暮らしているのか。実はどこで生まれ暮らしていようが人間の本質はあまり変わらないのではないか。観覧者の方々にこんな疑問を持っていただけたとしたら，私にとって今回の展覧会は大成功です。

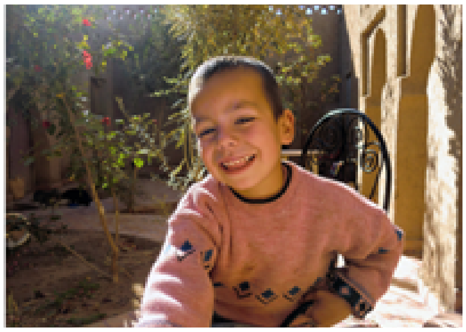
そして，そうした疑問に解を与えるべく，あらゆる学問領域において京都大学の多くの学生が世界に出て行き，世界の学生達と交流を深めていくとしたら，頼もしい日本の未来が開かれるのではないか，と思います。

総合博物館は昨年, APRU（アジア環太平洋大学協会）の援助を得てシンポジウムを開催し，参加国の大学博物館との交流を深められたと聞いています。大野照文先生，森純一先生からは，今回の展覧会が，たとえば，APRU 出身の本学留学生が自分の国を写真で紹介するような企画につながれば，というお話をいただいています。

今回の取り組みが，京大生と世界の学生の接点を増やし，京都大学に，国際色溢れる創造的な地盤を築くきっかけになれば，これほどうれしいことはありません。この地盤こそが，世界で先導的な役割を果たす京大生を生み出すと信じています。

謝意：本企画に際しまして，元京都大学総長 長尾眞，国際交流推進機構長 森純一教授，総合博物館長 大野照文教授，総合博物館 岩崎奈緒子教授，情報環境機構長 美濃導彦教授，国際高等教育院 喜多一教授，国立台湾大学生物産業通信発展学 学部長 岳修平教授（農業陳列館館長兼任)，図書資料学 林維真助教授には多大のご支援を賜りました。心より御礼申し上げます。

（京都大学工学部　地球工学科　四年生　宮崎祐輔）



（左上）2010 年 9 月ベトナム, ニャチャン。初めての海外, 初めての一人旅, 初めて日本を外から眺めて。（中央上）2011 年 2 月モロッコ, ハシシラビード。子供が元気なのはその国が元気な証拠。（写真右）2011 年 3 月台湾九份。最も外国人の友達が多い国。（左下）2012 年 9 月トルクメニスタン，ダルヴァザ。水も食べ物も尽きた時，幸運にも現地人に命を救われた砂漠にて。（中央下）2012 年 10 月ウズベキスタン。現在も縮小を続けるアラル海。教科書でしか知らなかったことを自分の目で確かめました。

台湾大学博物館群と国際シンポジウム

2013 年 4 月 26 日

総合博物館は，国立台湾大学博物館群と国際シンポジウム「University Museum Activity Creates Future of University」を清風荘で共同開催しました。学内をはじめとして 5 ケ国 30 名が参加し，当館および台湾大学博物館群から各 4 名の大学博物館に関するテーマの講演と討論会を行いました。

本シンポジウムは，総合博物館が継続的に実施している台湾大学博物館群との学術交流をさらに発展させ，大学博物館の国際ネットワークの構築に両大学が積極的に参画していくことを目指し実施しました。

大野照文 総合博物館長の挨拶で始まったシンポジウムは，永益英敏 総合博物館准教授（午前），本川雅治 総合博物館准教授（午後）が司会進行を行い，8 名の講師が総合博物館および台湾大学博物館群の現状・問題点などを報告し，それぞれの講演について，参加者との活発な意見交換が行われました。

参加者による意見交換は，二つのセッションや討論会の中だけではなく，昼食や茶会の交歓の場，清風荘の庭を逍遥しながらも活発に行われ，歴史的建築物の持つ場や時間感覚を共有しながら，大学博物館や大学の未来に対する建設的な議論が濃密に展開されました。最後に，大野館長がまとめと閉会挨拶を行い 4 時間以上にわたるシンポジウムを終了しました。

青空子ども博物館 in 円山

2013 年 5 月 5 日

円山公園音楽堂で「青空子ども博物館in円山」（主催：総合博物館・円山公園音楽堂事務局・京都東ロータリークラブ，協力：総合博物館ショップ「ミュゼップ」）を開催しました。

これは，毎週土曜日に総合博物館で開催している対話型解説イベント「子ども博物館」の特別版で，2007 年から毎年「子どもの日」にちなんで円山公園音楽堂で開催しているイベントで，今年で 7 回目を数えます。

総合博物館長の開会宣言，山科隆雄 京都東ロータリークラブ会長の挨拶で好天の中，イベントが開始しました。今年は「子ども博物館」の 9 プログラムの人気コンテンツ（多面体をつくろう，化石の話など）に加えて，桜井弘 京都薬科大学名誉教授（元素周期表同好会）を交えておこなった「えれめんトランプ」大会，京都東ロータリークラブが定期的に開催している「公開子ども文化塾」から「出汁の飲み比べ」プログラムを提供していただきました。

「地質の日」記念企画展

2013 年 5 月 11 日～ 12 日

5 月 10 日は，1876 年，ライマンらによって日本で初めて広域的な地質図，「日本蝦夷地質要略之図」が作成された日です。また，1878 年のこの日は，地質の調査を扱う組織（内務省地理局地質課）が定められた日でもあります。これらにちなんで，5 月 10 日は地質の日とされ，各地でイベントが実施されています。

総合博物館でも，本学地質学鉱物学教室と共催で地質の日記念イベントを毎年実施してきましたが，本年も，5 月 11 日，12 日に「地質の日」記念企画展「大地は語る 2013」を開催しました。

大学で行われている地学研究の内容をただ単に紹介するだけでなく，実物標本を用いた体験企画や，日夜研究に励んでいる大学院生，教員の講演もまじえた，研究者たちの生の声が聞けるイベントとなりました。

総合博物館日誌（平成 25 年 1 月～平成 25 年 6 月）

展示

実施日	名称
1 月 9 日 (水) - 2 月 3 日 (日)	特別展 マリア十五玄義図の探究
1 月 16 日 (水) - 3 月 24 日 (日)	特別展 ウフィツィ・ヴァーチャル・ミュージアム
5 月 15 日 (水) - 6 月 30 日 (日)	ロビー展示　宮崎祐輔写真展 「21 才の 21 ケ国の旅」

レクチャーシリーズ

実施日		内容・テーマ	講演者
1 月 12 日 (土)	no.108	ノーベル賞と京都－新聞記者の目から－	尾古 俊博（元京都新聞記者）
2 月 9 日 (土)	no.109	高精細画像で味わうルネサンスの名画	岡田 温司（人間・環境学研究科・教授）
3 月 9 日 (土)	no.110	模写から何がわかるの？	武田 恵理（文化財保存修復スタジオ代）
4 月 20 日 (土)	no.111	ウシの秘密をさぐろう	守屋 和幸（情報学研究科・教授）
5 月 11 日 (土)	no.112	南極に 6 億年前の大陸衝突帯を求めて	河上 哲生（理学研究科・助教）
5 月 12 日 (日)	no.113	ヒマラヤ山脈の上昇とモンスーンの誕生	酒井 治孝（理学研究科・教授）
6 月 22 日 (土)	no.114	国際宇宙ステーションから観測した地球	斎藤 昭則（理学研究科・准教授）

総合博物館セミナー

実施日		内容・テーマ	講演者
1 月 11 日 (金)	第 48 回	京大発のアイデアで世界に挑戦 －ヘリオトロン型磁場による超高温プラズマ閉じ込めの歩み－	水内 亨（エネルギー理工学研究所・教授）
2 月 8 日 (金)	第 49 回	空間を知覚してからだの動きを制御する	久代 恵介（人間・環境学研究科 高等教育研究開発推進センター・准教授）
2 月 14 日 (木)	第 50 回	Taxonomic revisions of SE Asian bats and its consequences on other disciplines	Gábor Csorba（総合博物館･客員教授）
3 月 8 日 (金)	第 51 回	研究手法としての再現模写－観る・考える・描く－	武田 恵理（文化財保存修復スタジオ主宰）
4 月 12 日 (金)	第 52 回	台湾「大学博物館」探訪	中川 千種（総合博物館・事務補佐員）
5 月 10 日 (金)	第 53 回	ねむりはみえるか？ 睡眠文化研究のこれまでとこれから	重田 眞義（アフリカ地域研究資料センター・教授）
6 月 14 日 (金)	第 54 回	Documenting dendroflora in the temperate zones — a Hungary based international project — 世界温帯域の樹木誌－ハンガリーを基点とする国際プロジェクト－	István Rácz（総合博物館・客員教授）

発行日　2013 年 7 月 31 日
編集・発行　京都大学総合博物館　電話　075-753-3272
〒 606-8501　京都市左京区吉田本町　FAX　075-753-3277
http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/